

いしづち

愛媛労災病院広報誌第23巻第2号

（通巻第104号）

2023年4月5日発行

発行人：院長 木戸健司

理念

当院は働く人々のために、そして地域の人々のために信頼される医療を目指します

基本方針

1. インフォームドコンセントの実践
2. 安全かつ良質な医療の提供
3. 勤労者医療の推進

当院では、医の倫理と病院の理念に基づいた医療を積極的に推進していくため、患者さんの基本的な『権利と責務』を、以下のよう宣言します。

【患者さんの権利】

- 1) 人としての尊厳を保ちながら、良質の医療を受ける権利
- 2) 十分な説明と情報提供を受け、自らの意思で治療法の決定やセカンドオピニオンを希望する権利
- 3) 個人に関するプライバシーを保護される権利

【患者さんの責務】

- 1) 疾病や医療を理解するよう努力する義務
- 2) 医療に積極的に取り組む義務
- 3) 快適な医療環境づくりに協力する義務

愛媛労災病院訪問看護ステーション開設のご挨拶

全国に労働者健康安全機構労災病院が32箇所ある中で、愛媛労災病院が初めての訪問看護ステーションを開設することになりました。まだまだ未熟ではありますが、地域の皆様と連携して訪問看護ステーションを運営していく所存です。また、当院が目指している「地域密着型病院」として、地域の皆様とより一緒に地域貢献できるよう、精一杯頑張っていきたいと思っています。これから愛媛労災病院訪問看護ステーションをよろしくお願ひします。
（看護副部長 大山淳子）



星川 みどり（管理者）

2023年3月1日に訪問看護ステーションが開設され、これからどんな看護が提供できるのか、どのような利用者さんと関わりあえるのかワクワクしています。私はこれまで、整形外科・ICU・産婦人科・循環器内科・呼吸器内科病棟で勤務をして、多くの患者さんと関わってきました。中でも印象に残っているのは、終末期の患者さんの「最期は家で過ごしたい」という思いを聞き、ご家族や関係機関と共同して患者さんが望まれる場所に帰ることができた事例です。後日ご家族が「住み慣れた場所で過ごすことができ、良かった。」と話しをして下さり、胸がいっぱいになりました。このような経験から、患者さんの思いに寄り添った訪問看護師になりたいと思うようになりました。日常生活と療養生活を調整し、その人らしく過ごせる形を利用者やご家族と共に探していくことが訪問看護師の役割と考えています。管理者として新米ですが、これからよろしくお願ひします。



北館の3階です

愛媛労災病院訪問看護ステーション開設のご挨拶	1
愛媛労災病院訪問看護ステーション スタッフからのメッセージ	2

肺がん診療について	3
入谷式足底板療法基礎セミナー受講して	4
第9回 市民公開講座 YouTube配信について	4

愛媛労災病院訪問看護ステーション スタッフからのメッセージ**富林 春江（師長補佐）**

地域包括ケアシステムの推進に向けて、ますます訪問看護は重要となります。私は、今まで病院での看護経験しかありませんが、在宅での患者さんの生活に携わることがとても楽しみです。シームレスな看護の実現に向けて、自分が持つ六感をフル稼働していきます。その上で、利用者やご家族が求めているものを捉え、在宅療養を支援していきたいと考えています。

**越智 早苗（看護師）**

外科系の病棟経験が豊富にあり、ストーマケアや創傷処置はお任せ下さい。訪問看護は初心者ですが、病棟と兼任スタッフであることを最大限に活かし、入院から在宅療養支援まで一連の支援をスムーズに行い、フットワーク軽く対応していきたいと思ひます。

**大沢 由香（がん化学療法看護認定看護師・特定看護師）**

院内ではがん化学療法看護認定看護師として活動しています。今までも、自宅で過ごしたいと希望されたがん終末期患者さんや、心不全・慢性呼吸器疾患・糖尿病・ALS（筋萎縮性側索硬化症）の患者さんの訪問看護を行ってきました。患者さん・ご家族が安心して過ごせるように、早期に症状の変化に気づき、迅速な対応ができるように努めたいと思っています。

**三浦 彩（緩和ケア認定看護師）**

緩和ケア認定看護師として、患者さんやご家族との対話を大切にしています。がんと診断され、動揺される方が多くいらっしゃいます。昨今ではACP（アドバンス・ケア・プランニング）が推進されており、緩和ケア認定看護師の役割は大きいと感じています。対話を通して、相手の考えや思いを理解することは「その人らしさを大切にした生き方」を支援していくことに繋がります。訪問看護においても、対話の中で患者さんやご家族の思いを確認して、寄り添った訪問看護ケアを実践していこうと思ひます。

**神野 律子（看護師）**

住み慣れた家へ戻り、病気を抱えながら不安なく在宅療養が継続できるように、生活環境の中にある問題点に気づけるような関わりをしていきたいと思ひます。慢性疾患や認知症を抱える疾患に対するケアだけでなく、多職種と連携して必要なサービスに繋ぎ、不安を抱えているご家族のサポートもできる訪問看護師を目指します。



肺がん診療について ～治療から自宅療養まで～

第二外科部長 小林 成紀

● 外科診療

当院外科では、消化器・一般外科、呼吸器外科、血管外科（静脈瘤のみ）に対して診療を行っております。今回は、呼吸器外科の領域の中でも中心となる肺がんについてのお話をさせていただきます。

● CTのすすめ

肺の検査でまず行うべき検査はX線検査ですが、胸部X線検査では場所や読影者により検出力にばらつきがあります。これにより、約19%が偽陰性になるとの報告があります。実際に、今までに治療の適応となった患者さんの中にも、他の部位で異常を指摘されて施行されたCTで、別の部位に癌が認められた症例も多いです。

特に肺がん検診ガイドライン（2022年度版）によりますと、重喫煙者に対する低線量胸部CTを用いた肺がん検診は、死亡率減少を示す証拠があるので勧められるとされております。（非/軽喫煙者に対しては勧められていません）

精査の必要性があると判断された患者さんや、CTの必要性に悩まれる患者さんなどの症例がございましたら、当院へご紹介頂けましたら幸いに存じます。

● 治療について

患者さんのステージに応じて治療方針を決定しています。手術が選択される場合には、積極的に胸腔鏡を用いた低侵襲手術（VATS：Video-assisted Thoracoscopic Surgery）を行っております。当院では、2cmの創が2か所と、4cmの創が1か所の合計3つの創からアプローチしており、完全鏡視下での手術を行っております。腫瘍径が大きい場合肺を取り出す際に小開胸が必要となる症例や、合併切除が必要になる症例

など、病態により小開胸手術や開胸手術が望ましい場合には、患者さんに十分な説明をさせていただき、適切なアプローチ方法を選択しております。手術は、入院から退院まで約2週間の日程で行っておりますが、患者さんのニーズや病態に応じ、個々に対応しております。

● 在宅医療の支援

肺がん治療により治癒が望める患者さんであれば良いのですが、発見時に手術や抗がん剤などの積極的な治療が困難な場合もございます。

癌性胸膜炎により胸水が貯まるようになった患者さんには、入院の上でトロッカーを留置して胸膜癒着療法を行っております。また、癒着療法が困難な場合には、外来あるいは短期入院での胸腔穿刺・排液を行っております。

また、在宅診療で点滴ラインを確保するのが困難な患者さんに対して中心静脈ポートの留置を行っております。患者さんの病態に応じて、外来手術もしくは短期入院での手術を行っております。

在宅医療を行って頂いていらっしゃる先生方、何かございましたらご紹介のほど、よろしくお願いたします。



入谷式足底板療法基礎セミナー受講して

中央リハビリテーション部 主任 理学療法士 大久保 勝朗

みなさん、『足底板』を聞いたことがありますか？動物の中で唯一、人間のみ二足直立歩行で移動します。そのため、地面に接しているのは足部のみです。足部は床からの押し返す力、いわゆる反力を受けながら歩いています。床からの反力は、地面から靴—中敷—ヒトの足へと伝達されますが、足底板は中敷に当たる部分に凹凸をつけて調整するものです。靴をこだわって選択される方はいますが、中敷きまで着目する方は少ないと思います。靴も中敷も重要です。なぜならば、ヒトの足には一対で56個、身体全体の約1/4もの骨が集中し、かつ、複雑に機能しており、足の歪みや筋肉の機能不全により脚・足の障害を引き起こします。

その多くは小さなメカニカルストレスの繰り返しで障害を発生させるため痛みを誘発することもあります。このストレスに対して、足部を制御する足底板は、歩行などの運動の中でさまざまなストレスを軽減することが可能であり、



リハビリテーションとして有効な治療手段の一つと考



えられています。

今回受講した入谷式足底板の特徴は、単に既成のものを貼付するものではありません。機能的な観点から、個々の患者さんや選手にテーピングやパッドを用いて、足部の関節の位置および高さを決定してから作製します。また、その際に歩行などの動作をしてもらいながら行います。

目的として①個々の足の機能を発揮させるため、②運動のつながりをスムーズにするため、③静的および動的な姿勢制御を行うため、④障害に対して、⑤さまざまな運動特性に応じるためなど、多岐に渡ります。足底板は、脚の障害を中心にマルアライメント（骨の配列が崩れた状態）による障害に対して幅広く応用できます。

人の歩き方を見ていただくと分かると思いますが、みなさんさまざまな歩き方をしておられます。しかし、実のところ足本来の機能を発揮した歩きをできている方は多くありません。

足底板は股関節や膝が痛い、外反母趾がある、歩き方が気になる、運動のパフォーマンスを向上したいなど、その人に合ったものを作ることができます。

現在、東予地区で足底板を制作している施設はほとんどなく、当院のリハビリテーション部の新しい取り組みとして、日々研鑽を重ねています。近い将来、足底板をご提供できる日が来たら、この場をお借りしご報告させていただきたいと思っています。

第9回 愛媛労災病院市民公開講座

「知ろう心不全～新居浜市民の心臓もまもりたいけん～」

YouTube配信中!!

